

山月記

第一段落

隴西の李徴

博学才穎

性格：・狷介・自ら恃むところす

こぶる厚い

天宝の末年

・進士試験に合格

・江南尉に補せられる

賤吏に甘んずるを潔しと
しない

いくばくもなく

・官を退く

・故山に帰臥し、詩作にふける

第一段落

• 文名は容易に揚がらない

• 生活は苦しくなる

焦燥
絶望

数年の後

• 一地方官吏の職を奉ずる

|| かつての同輩の下命を拝する

自尊心を傷つける

抑え難い狂悖の性

↓ 発狂

一年の後

• 二度と戻ってこなかった

第二段落

翌年

陳郡の袁傜 II 監察御史

・李徴と同年に進士に合格

・李徴にとって最も親しい友

・性格：温和

(↓李徴と衝突しなかった)

朝の暗いうちに出発

↓ 馭吏の言葉 (人食い虎の件)
を退ける

← 「理由」 供回りが多勢
であった

第二段落

一匹の猛虎の出現

※「あぶないところだっ

た。」

=

人間の声 || 李徴の声

久闊を叙する

※李徴が叢から出てこない理由

- 異類の身（||あさましい姿）
を故人の前にさらせない

- 袁傔に畏怖嫌厭の情を起こさせる

||超自然の怪異

素直に受け入れる

第三段落

今から一年ほど前

汝水のほとり

← 戸外で誰かが呼ぶ

← 声を追うて走り出す

← 気がつくくと虎となっていた

← 夢かと思った↓夢でない

← 茫然・懼れた

理由も分からずに生きていく↓

生きもののさだめ（不条理な運命）

←

第三段落

← 死を想う

← 一匹の兎

← 自分の中の人間は姿を消す

← (虎としての最初の経験)

語るに忍びない所行をし続ける

人間の心

(一日のうち数時間)

↓ しだいに短くなっていく

情けなく、恐ろしく、

＝ 憤ろしい



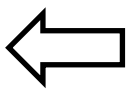
第三段落

どうして虎などに
なったか
←
どうして以前、人間
だったのか



すっかり消えてしまおうのではない
いか

しあわせ
このうえなく恐ろしい



この気持ちは誰にも分からない
(孤独感・絶望感)

李徴の頼み

今も記誦している詩を伝録してほしい

↓一部なりとも後代に伝えないでは、死んでも死にきれない（＝悲痛な執念）

（袁傔の感想）

- ・格調高雅・意趣卓逸
- ・非凡な才



第一流の作品となるのには、どこか（非常に微妙な点において）欠けるところがある

第四段落



自嘲

↓あさましい身

お笑い草ついで↓即席の詩

第五段落

なぜこんな運命になったか

(李徴の考え)

(人々) 倨傲 尊大

努めて人と交わりを
避ける

(内心) ほとんど羞恥心に
近いもの

- 師に就かない
- 詩友と交わって切磋琢磨しない
- 俗物の間に伍することもしない

第五段落

（分析）

臆病な自尊心

尊大な羞恥心

猛獣（虎）

・妻子を苦しめ、友人を傷つける

・才能の空費

卑怯な危惧

刻苦を厭う怠惰

（憤悶と慙恚）飼いふとらせる

外形を内心にふさわしいものに
変えてしまった（||虎の姿）

第五段落

← 胸を灼かれるような悔い・悲しみ

← ↓ 誰かに訴えたい

誰一人おれの気持ちをつかってくれぬ者はない

|| 孤独感の悲痛な訴え

第六段落

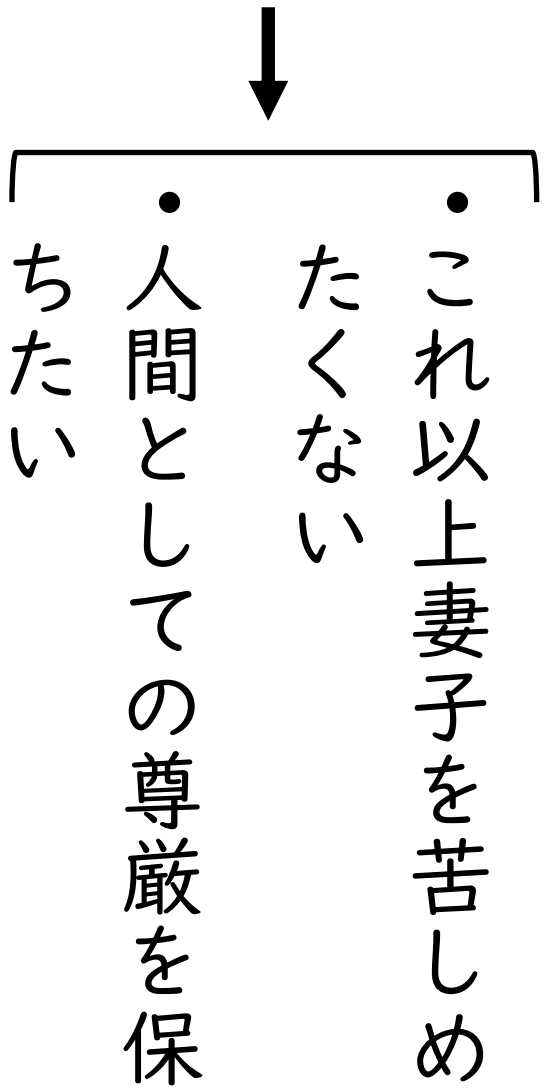
李徴のもう一つの頼み

(＝妻子のこと)

・妻子に自分は既に死んだと告
げてほしい

＝

今日のことは明かさな
いでほしい



・道塗に飢凍することのないよ
うに計らってほしい



第六段落

(自嘲) →

本当は、まず、このことのほうを先にお願ひすべきだったのだ

=

人間~~~~~だったなら

|| 他人を愛し守れる存在

※ 帰りにはこの途を通らないでほしい

|| 故人を認めずに襲いかかるかもしれない

→ 「今の姿をもう一度お目にかKEY
よう」

|| 自分に会おうとの気持ちを起
こさせないため

第七段落

堪え得ざるがごとき悲泣の声

・袁傜との永遠の別れ

・人間の世界との永遠の別れ

再びその姿を見なかった



主語……袁傜

効果

・虎となった李徴の孤独な姿が印象づけられる

・虎になった人間の存在を暗示

|| 不気味さ